

焦らずに、たくさんの音声を聞かせ、英語を英語で捉える感覚を育みたい

上智大学短期大学部 教授 ^{かの}狩野晶子

新学習指導要領が全面実施となった小学校。コロナ禍の影響で、授業が計画通りに進まなかった学校も多いだろう。そうした状況だからこそ、小学校の「外国語活動」「英語科」のねらいを忘れずに、目の前の子どもをしっかり見取り、一歩ずつ学びを進めていくことが大切だと、上智大学短期大学部の狩野晶子教授は語る。

狩野教授からのメッセージ

- 1 英語習得のポイントは、「音声」。デジタル教材も活用しながら、大量の音声をインプットしよう
- 2 英語の学習評価も、ほかの教科と同じ感覚で捉える
- 3 目の前の子どもを見取り、当初の計画にとらわれずに、目標と指導を見直すことが大切



かの・あきこ 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。専門分野は、第二言語習得、英語教育、児童英語教育。上智短期大学（現・上智大学短期大学部）助教、准教授を経て、2020年4月から現職。自身が幼少期を海外で生活し、英語を習得した体験を踏まえた研究・実践を行っている。

小学校英語の基本

英語の習得は 覚えて、忘れての繰り返し

—— 全面実施1年目となった2020年度を振り返って、小学校の新学習指導要領の実践上のポイントはどこにあるとお考えでしょうか。

狩野 新学習指導要領は、国が目指す英語教育を明確に示しています。ただ、小学校の英語教育は黎明期にあります。目指す先が分かっても、すべての学校現場がそこに到達するのは時間がかかると捉えた方がよいかもしれません。

そもそも、子どもは教えた通りに習得するわけではありません。教えたことをすべては取り込めず、アウトプットできるようになるのは、さらにその一部です（図1）。言語は、一度覚えても忘れて、また覚えて、といった学びを根気強く続けること

で習得していくものです。英語力の伸びが見られないからといって詰め込み型の指導を重ねれば、子どもを英語嫌いにしてしまうだけです。小学校英語は英語学習の地ならしをする時期ですから、肩の力を抜いて、子どもが「英語は楽しい」と思って中学校に進めることを大切にしてほしいと思います。

—— そうすると、指導内容のうち、小学校では何を優先すべきでしょうか。

狩野 私は、音声だと考えます。コミュニケーションにおいては、話の流れの中で意味を読み取る力が重要になりますが、それを養うためには、英語の場合、実際に英語を聞き、音声に慣れる必要があるからです。

たくさんの単語やフレーズを繰り返し聞いて、音の固まりが意味と結びついて頭に残っていると、文法を知らなくても誤った用法を聞いた際に、「いつも聞いているのと違う音だ」と

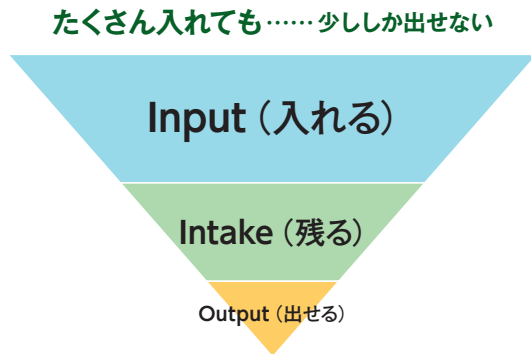
違和感を覚えます。いわばそうした直感のようなものをつかんでいけば、中学校以降に文法事項を学習する際にも高い学習効果が期待できます。

言い換えると、違和感を覚えるようになるくらいに音声を聞かせることが大切です。それは、音声を柔軟に受け止められる児童期だからこそできる学びです。

児童期の子どもは、音声に敏感で、音の固まりを丸ごと処理する力がありますから、耳にした英語の表現をチャンクとして丸ごと覚えて再現できます。また、楽しいと感じれば、飽きずに同じことを繰り返す傾向があることも、言語習得には適しています。さらに、全部を理解できなくても気にしないという、曖昧さを受け入れる耐性もあります（図2）。つまり、児童期ならではの、言語習得に適した複数の特性があるのです。

本学では、学生が地元の小学校で

図1 英語学習の考え方



* 狩野教授の資料を基に編集部で作成。

英語授業を行う機会が年40時間あります。授業はすべて英語で進め、学生の話す英語が子どもに伝わらなくても、身振りをしたり、絵を添えたりして何度もやり取りします。すると、子どもも学生の言いたいことを考え、「○○じゃない？」と推測して反応します。英語だけでも、双方が知恵を絞ることで、深い学びにつながっています。

授業中に子どもが分からないという表情をすると、先生方は不安になり、つい日本語を使ってしまいかもしれません。しかし、そこは子どもを信じて我慢し、たくさんの英語を使い続けることで、子どもへのインプットを増やしてほしいと思います。

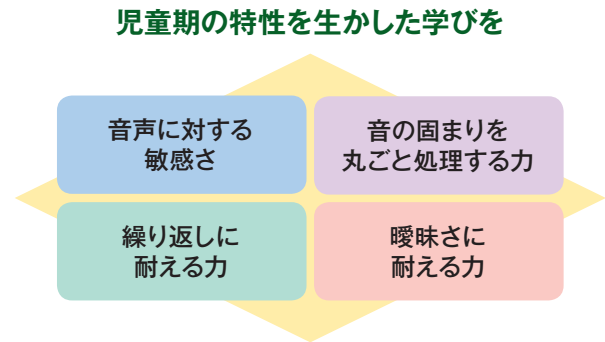
ICTの活用

英語力に不安があれば デジタルの力も借りる

— 音声的大事といわれても、英語力に自信のない先生は、途方に暮れてしまいそうです。

狩野 そこはICTの出番です。「GI GAスクール構想」で配備されるタブレット端末を活用し、様々な英語の音声に触れる機会を増やしましょう。動画配信サイトには、多種多様な英語学習動画が公開されています。また、デジタル教材には、自分の発音の正しさを判定してくれる音声認識

図2 児童期の子どもの特性



* 狩野教授の資料を基に編集部で作成。

機能があるものや、クイズ形式で楽しみながら学ぶものなど、紙の教材ではできない仕組みがあります。低・中学年でも1人での学習が可能です。

コロナ禍で対面での言語活動が難しい今、オンラインでの双方向の言語活動もぜひ実現したい活動です。授業で練習した内容を実践する場が必要であり、実践してこそ実際のコミュニケーションをイメージして練習ができるからです。前述した本学の学生が行う小学校での英語の授業は、今年度はオンラインで行いました。子どもと学生が4～5人ずつのグループになり、発表やクイズで楽しそうに活発なやり取りをしていました。

ただ、オンラインでのやり取りは、低学年の子どもにはまだ難しいかもしれません。集中力が続かないことと、画面に表示されない情報を読み取る力が十分に育っていないからです。物事を抽象化して捉えられる高学年の活動に取り入れるとよいでしょう。

5・6年生の指導

アルファベットを身体感覚で覚えることが文字習得の土台に

— 5・6年生では文字指導が始まります。どのような点に気をつければよいでしょう。

狩野 3・4年生で行う文字の導入指導がポイントです。いきなり紙に

書かせずに、アルファベットの字形を体で表現する体操などを活用し、まずは体を動かして覚えさせましょう。アルファベットを身体感覚としてインプットしておく、5・6年生で紙と鉛筆を使った時のアウトプットがスムーズに行えます。国語科では、1年生から、空書きなどの全身を使った文字指導を丁寧に積み上げていると思いますが、英語の文字指導も趣旨は同じです。

先生方には、ご自身が中学校以降に学んだ英語の授業の方法が小学生に最適なのかどうかを、自問する姿勢をぜひ持っていただきたいと思います。文字や文法も、音声を伴った言語活動の中で習得を目指すのが、今、求められている英語学習です。

小学校の英語教育は、中学校の前倒しではありません。小学校で英語学習を行うねらいを十分に理解し、児童期の特性を生かした言語活動を通じた学びを軸として授業を実践することが重要です。教育委員会は、先生方に指導観の転換を促すとともに、発達段階に応じた指導などをしっかり伝えてほしいと思います。

— 5・6年生では、観点別評価と評定が行われます。小学校の先生には初めてのことであり、評価の仕方が分からないという不安の声も聞かれます。

狩野 英語科の学習評価も、ほかの教科の学習評価と同じように考えて

みてください。例えば、体育科の学習評価をどのように行っているでしょうか。子どもによって身体能力は異なりますし、習い事で、既に水泳や球技などの技術を身につけている子どももいます。その中で先生方は、技術のレベルだけでなく、技術の伸びや試合中のチームへの貢献具合なども見取って評価しているはずです。それはおのずと、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力の評価につながっています。

英語科も、スタート地点が違う子どもを同じ軸で評価しないという点では同じです。ただ、英語の学習評価は多くの先生方にとって初めての経験となります。各校が評価基準をつくる際のよりどころとなるように、教育委員会が見本となるループリックを示すとよいかもしれません。

2021年度の指導の留意点

目の前の子どもに応じた目標設定と学習計画を

—2020年度は、コロナ禍の影響で思うように授業を進められなかった学校が多いと思います。2021年度の指導ではどのような点に留意すれば

よいでしょうか。

狩野 最初にお話ししたように、英語はスパイラルに学習を積み上げて習得していくものです。今できていないからといって焦る必要はありません。大切なのは、子どもの学習状況を把握することです。2018・19年度は移行措置期間であり、2020年度には臨時休業がありました。特に、新6年生は5年生までの3年間にどれだけ積み上げたかによって差が出やすいと考えます。各学年の学習を進めるための土台ができていないままに新学習指導要領の内容を指導しても、目指す成果に結びつくとは限りません。学年別のポイントを図3に示したので、参考にしてください。

2020年度は対面でのやり取りが制限されていたため、言語活動などが十分でないこともあるでしょう。その際には、指導計画の通りに進めることよりも、スパイラルな積み上げを丁寧に行ってみてください。そうした指導によって、次の学年での伸びしろがつくれます。

新5・6年生は、前年度までに音と文字を結びつける活動が十分に行われていない可能性もあります。その状態で書く指導をしても、単語が記号に

なってしまう、意味のある学習活動になりません。「読み」「書き」は学習内容が文字として形に残るので、テスト等の準備が容易で保護者などへの説明責任も果たしやすく、学習評価に使いやすいものです。しかし、それらを理由に、「読み」「書き」だけを評価の対象とすることは避けましょう。

先生方は、小学校での学習範囲をしっかりと終わらせて中学校に送り出したいという思いを強くお持ちのことでしょう。しかし、小学校卒業後も英語の学習は続きますから、長い目で見ると、中学校以降の学びの土台となる力を小学校で身につけておく方が重要です。

学校現場が、既にある計画や枠組みにとらわれずに、目の前の子どもの実態に合った目標を立て、それを自校のCan-Doリストやループリックにあてはめて指導していく。その一歩を踏み出せるよう、教育委員会には情報を発信してほしいと思います。そのために、有識者の講演や全国の実践事例を通じて指導の見直しを支援するなど、情報発信の仕方にも工夫が必要かもしれません。小学校英語が、中学校、高校で伸びていく英語力の土台となることを願っています。

図3 2021年度 小学校英語の指導の学年別に見たポイント

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2021年度の指導のポイント
学年		小1	小2	小3	ゼロからの英語学習となる。音声のインプットを十分に行い、文字に慣れ親しむ。
	小1	小2	小3	小4	3年生の国語でローマ字を学習している。文字を理解しているように見えても安心せず、大文字と小文字、音と文字をしっかり結びつけてインプットさせる。
	小2	小3	小4	小5	通常授業で3・4年生の「外国語活動」を行った場合よりも、「聞く」「話す」活動が不足していた可能性もある。文字指導では、子どもが英文を読めなくても、やり取りのパターンを絞って繰り返し音声を聞かせることで、自分で音声化できるようにする。単語を読みやすくしようとカタカナをつける必要はない。
	小3	小4	小5	小6	5年生での言語活動が十分ではないことが想定される。自分の知っている英語で話すようにし、分からないことは調べて伝える活動を取り入れたい。一方で、読み書きをある程度行い、中学校進学に向けて自信をつけさせることも大切。

移行措置期間

授業時数は、3・4年生は年間15～35時間、5・6年生は年間50～70時間と幅があった

全面実施

2020年度は、コロナ禍の影響で言語活動を十分に行えていない場合もある

* 狩野教授への取材を基に編集部で作成。